

歴史的な惨敗、アベ政治の終わりの始まりを展望する

「驕る平家は久しからず」という、まともな権力者ならだれでも想起する言葉は、安倍政権内には思い起こす人がいなかったのだろう。歴史的な自民党惨敗を喫した東京都議選の結果、安倍長期政権はもちろん、独断専行で持ち出した安倍改憲戦略も先行き見えないぐらつきを始めた。いや、それどころか、安倍退陣も射程距離に入ってきた。

だが、この期に及んでも首相と政権首脳部にはそうした状況に置かれていることが見えないらしい。悪あがきとしか言えない強気の言動と画策に狂奔する姿は、こうした宰相と政治家を選んだ国民として恥ずかしい限りと言える。

たぶん、彼らにそうした強気の気分を持たせるのは、都議選で惨敗しても、内閣支持率が下がり続けても「代わり得る政権がない」という、野党の足元を見透かしているからであろう。それこそが、森友学園問題で窮地に追い込まれても、加計学園問題で総理辞職の瀬戸際に立ってもシラを切り続け、他方で「共謀罪」法の無茶苦茶な強行採決を押し通した最大の理由である。

だが、都議選の結果を待つまでもなく、安倍一強の政権や与党内には、こうした驕りに対する危機感が広がり出しており、歴史的な惨敗は“安倍降ろし”の引き金になるのは必至だ。「世間の風」の読み方は、強気一手張りで風を読めない宰相よりも、「風見鶏政治家」の方が一枚も二枚も上手だ。与党が衆参両院で3分の2の議席を擁する中での当面の政局は、再起を秘めて“ボンボン”のお守りをしてきた麻生副総理や、後釜をねらって満を持してきた派閥の長たちによる“党内政権交代”が焦点になるだろうが、問題はその先にある。

圧倒的な議席を背景に政権のたらい回しが行われても、来年12月には衆院議員の任期満了を迎え、翌年7月には再び参院選を迎える。衆院解散を任期満了近くまで延ばしたら、半年後の参院選と選挙準備が重なり、再び政権交代を問う選挙に直面することになる。

その時期には、経済原則を無視したアベノミクスの破綻と、経済、財政の混乱状態が混然一体となり、この国の政治、経済、社会は混乱の中で国の進路が問われることになる。

すでに国際社会では、トランプに追随するこの国の政治力は信用を失い、バブル崩壊後30年にわたって迷走してきたこの国は、いよいよ待ったなしの瀬戸際を迎える。原発災害を「アンダーコントロール下にある」と、世界をだまして誘致した2020年五輪の行方も流動的になるかもしれない。エネルギー政策では、3.11フクシマ災害の後いち早く脱原発に踏み切ったドイツだけでなく近隣の台湾、韓国、ベトナムも脱原発に踏み切ったが、この国はいま北朝鮮ミサイルの原発への落下に怯える次元にある。

人口減少と爆発的な増加が世界で同時進行し、地球環境が待ったなしの瀬戸際を迎える21世紀世界の新しいあり方を展望できる政治が、今こそ求められている。「成長なくして発展なし」という、カビの生えた政治哲学に別れを告げ、新しい時代をリードする政治家と政党が求められる。そんな政党でなければ、迫りくる政権交代の受け皿にはなり得ない。野党共闘と市民の共同選挙の視野には、その先を読む視点が必要になっている。